

実践編である「Ⅱ地理的学習の展開」は、一 社会科指導計画と地理的学習、二 各学年での地理的学習とその評価、三 地理学習とその評価の3章からなり、第二章が詳しい。

理論編である「Ⅰ社会科と地理学習」の叙述は簡潔であるが、要点を的確に述べてあり、特に「地理的意識とその発達」は理論編の中の珠玉である。 (筑波大学教育学系教授)

■ 書 評 ■

石山忠造著『小学校社会科教育法』(図書文化社, 昭55年)

横 山 十 四 男

著者の石山忠造先生は、35年にわたって筑波大学附属小学校で教鞭をとられ、今年3月定年退官されてからも、昭和女子大学で社会科教育関係の講義を担当しておられる方である。本書の構成は、

- 第1章 社会科誕生の意味とその変遷
- 第2章 社会科の目標と内容
- 第3章 子供の発達傾向と能力の考察
- 第4章 地域の実態に即した「社会科の教育課程」
- 第5章 低学年の学習指導法
- 第6章 中学年の学習指導法
- 第7章 高学年の学習指導法
- 第8章 学習指導法の原理と創造
- 第9章 社会科の評価と指導

以上の通りであるが、「まえがき」で著者自身が言っておられるように、この本の重点は第5章～第8章に置かれている。小学校の低・中・高の各学年の社会科学習に関するきめ細かな実践事例が、豊富に納められている第5章～第7章と、それらをふまえながら、学習指導法の諸原理を総括したうえ、独自の学習指導法の創造を提唱しておられる第8章の内容は、まさに35年の経験を持たれるベテラン教師ならではの感を深くするものである。

「人間には“好み”というものがある。民間研究諸団体が主張する主義に対して、“好意”を

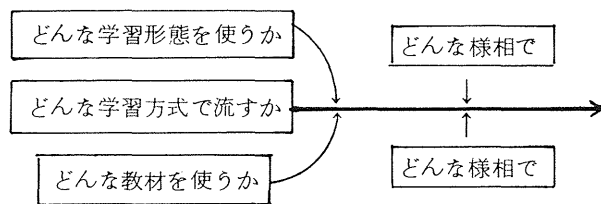
持ったり，“拒否反応”を示したりする教師があったが，そのいずれを取るにしても……（中略）……“子供と共に喜びや苦しみを味わい”ながら一步一步，手をつないで歩む方が，確かに“幸せ”を手にてできると考える……（中略）……

そのためには，客観的な立場に立ち，科学的な目でそれらを分析し，自分の考えで，“自分の学習指導法”を生み出すぐらいの情熱があってもいいのではないかと考えるのである」（226ページ）。

という言葉が著者の立場である。そして，さらに「これまで現場人としての我々は，学者から理論をもらい，それを実証する立場にあったし，そうすることが当然のこととして何ら疑いを持っていなかったのである。もうその時代は過ぎた。我々の手によって“学習指導の理論と実際”を形成していく時代がやってきているのである」という実践に裏づけられ，自信に満ちた宣言がなされている。

まさにその通りだと思う。社会科についてもさまざまな学習過程論が提唱され，現場教師がその研究・対応に忙しく奔走する姿も見られたけれども，社会科には唯一絶対の学習過程論があるはずがない。この教科の持つ深みと巾が大きいので，一つや二つの網ですべてをすくいつくすことは不可能なのである。

著者石山先生は「学習指導の構造」を，学習形態，学習方式，学習様相の三者の有機的総合に求め，それを次のように図式化して提唱しておられる。



学習指導過程の構造図 (243 P 所収)

学習形態としては，調査・報告・討議等 9 形態を，学習方式としては，問題解決・検証・発見・プログラム等 14 方式を，学習様相としては，個別・小集団・全体の 3 者をあげ，教材に応じてこれらを適当にかつ有機的に混合することが理想だとしておられるのである。

なおそのほか，「理性と感性を織りなす学習指導」（206ページ）とか，子供に学習意欲を促すための「おしめノート」（218ページ）の提唱など，長い経験に裏づけられた実践論が珠玉の如く各所にちりばめられている。（筑波大学教育学系助教授）